

VITA NOVA

新生

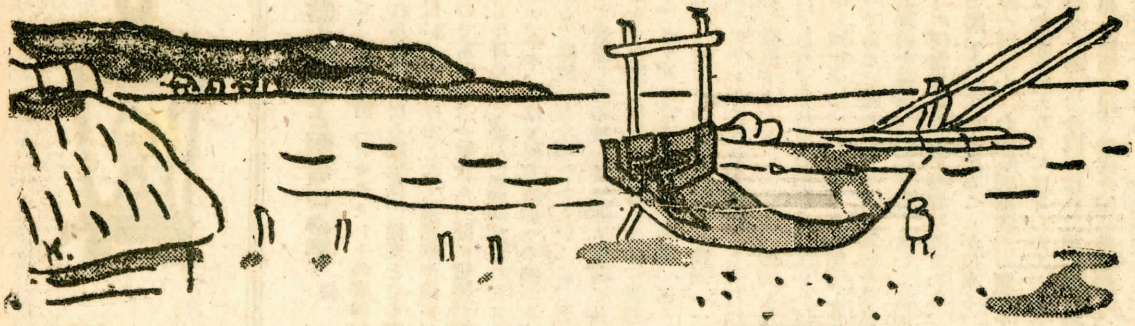
1946

6

JUNE

新生社発行

昭和二十一年六月一日發行 第二卷 第六號 (通卷 第八號)
昭和二十年十二月二十七日 第三種郵便物認可



新生 六月號 目次

民意政治への熱と警め……………佐々木惣一(二)

インフレーションの一問題……………有澤廣巳(六)

近代科學の成立……………下村寅太郎(四)

アメリカとロシヤの家族……………玉城肇(八)

農業危機を救ふもの……………大内力(一〇)

戦犯裁判について……………田岡良一(三)

若き日の河上博士の「經濟と道德」論……………住谷悦治(五)

悲劇的 喜劇的……………本多顯彰(元)

ソヴェート演劇斷想……………土方與志(三)

古鞆太夫一夕話(四)……………茶谷半次郎(元)

甘いと辛い(文藝時評)……………正宗白鳥(四)

罹災日録(四)……………永井荷風(四)

青春期(四)……………宇野浩二(三)

(作) その一日……………舟橋聖一(五)

▽編輯後記……………(四)

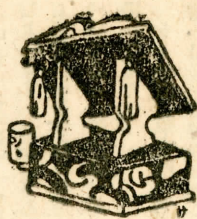
新發

はないかも知れない。

らうと思つてゐる。回顧すると、日露戦争前の事であるが、あの頃は、新しい「詩」が随分發表されてゐた。賣行きはよくないのに、詩集が頻りに出版されてゐた。「詩」の雑誌も出てゐた。私はそれ等の多くに殆んど興味を感せず、むしろ反感を抱いてゐたので、讀賣新聞の文藝欄などに於て、屢々無遠慮な罵倒を試みた。それに憤慨した岩野泡鳴は、私を新聞社に訪ねて来て、彼等の「詩」のために大に論争せんとしたのであつた。この時から泡鳴と親しくなつて、彼の詩論を屢々聴かされるやうになつたのだが、天性「詩」心を缺いてゐ

るらしい私は、彼の熱心にも動かされなかつた。泡鳴その他の新詩人の新作よりも、島崎藤村の舊作の方がまだしも面白いと思つてゐた。しかし、泡鳴の詩にも今になつて讀直すと、彼獨得の妙味がありさうである。あの頃から今日まで、兎に角「詩」は續いて來た。和歌や俳句が、團扇、將棋と同様に、一般民衆の間に盛んになつて來た間に、漠然「詩」と呼ばれる、變態なものも存在を續けて來たのは、不思議なやうである。リズムを無視し、調子を無視し、西洋詩の翻譯と見まがふものが「詩」として出現して

ゐるのである。しかし、これからの文壇に、かういふ「詩」が新たる形を整へ、團扇し完備し、一般民衆に對しても、「詩」の力を發揮するやうになるのではあるまいか。國粹の和歌は、天皇禮讃をはじめ、軍國主義や日本主義を盛んに歌ひ囃して來たので、今後、民主主義、自由主義談義に早變りするとしたら、それも甚だ面白いには相違ないが、それよりも形式に於て表現に於て西洋詩の翻譯たる「詩」の方が今後の時世には適當してゐるのではないだらうか。個人の思想感情の表現にしても、自由に豊かに表現し得られる筈である。(四月十八日輕井澤にて)



古勅太夫一夕話(その四)

茶谷半次郎

役不足をいつたこと (承前)

……年齢は南部太夫の方が私より上でしたが、「大序」へ這入つたのは私の方が半年ばかりさきでした。私は十二歳、向ふは二十三、四歳で遅れて這入つてきたので、番附でも「大序」では私よりズツと下になつてゐました。「大序」「序中」「序切」それから二段目の「切」をはじめ半分、次に全部を一人で語る——といふ順序で出世したのですが「序切」を語るやうになれば、どうやら一人前の太夫の資格ができたわけなんです。が、なかには顔だけは古いが、一向藝が上達しないもんで、生涯「序切」にヨグツキで終はる太夫もないではありません。——「序切」語りも、二段目語りも「付け物」(切狂言のあとへつく出し物)にも出れば「立端場」(まとまつた語り場のある端場)——たとへ

ば「國性邪」の「樓門」、「先代萩」の「竹の間」、「金閣寺」の「口」なども語ります。前に「口」がつかず、あとに「追出し狂言」のない一人で語る「付け物」を「坊主」といひます。「序切」語りだと、たいていこの「坊主」に出ますが、一人で語つても番附の太夫の名前の上に「切」といふ二段目語りの場合には坊主でなく「口」がつくのが慣例です。「付け物」に「口」がつき「追出し」があつたとへつくと、これはもう堂々たるもので、格式において三段目、四段目の「切」に遜色はないのです。——「序切」以下の太夫でも「立端場」を語ることはいくらもありました。要するところ「端場」も「切」を語る太夫の顔次第で、役場として重くも軽くもなるわけです。……當時私は二段目の「切」を語つてゐましたが、三代目越路さんの「端場」はよく勤めま

した。これは顔からいつて當然のことだつたのです。……私は十四歳から三十歳までに、前後五たび又樂座に出でゐます。出てゐたあいだは、巡業、東京の寄席出勤、病氣、つばら……いろいろでした。三十歳に文樂座へ歸參して、三十二の年の四月に古勅を襲名しまして、その六月から三代目清六さんに彈いて貰つてゐました。この話の時は三十八歳でした。……南部太夫の方は、ともかくズツと文樂座に居付いてゐたばかりに、もちろん勉強もしたからですが、私よりも早く出世して、一足さきに三段目の「切」に役がつくやうになつてゐたのです。……それにしても、今になつて南部太夫の「端場」を勤めやうと思つて修業してきた自分だつたらうか。今日では清六さんにも彈いて貰つてゐる身ではないか……さう考へると、私は驚いてくる不満が抑へきれなくなるのでした。……それに、今この役を獻つて受取ると、つい目の先にゐる兄弟子の津太夫や、伊達太夫(後に土佐)の「端場」もあとへ持つてこれかねないし、その場合にも断はれなくなる。こゝは愚案のしどころと考へましたので、清六さんとも談合の上で、断然休むことに肚を据へました。……このいきさつが、大塚師匠(舞臺引退後)も憶下

を預るや松屋町の師匠の耳にもすぐ道入つた様子で越前さんが心配されて宥の役に見へて、

「あなたの氣持はわかつてる。無理やない。しかし一旦きめた役割を替へるいふのも程かやないし、休まれても具合わるい。なんとか顔の立つやうに計ふよつて、こんどだけ出てもらはんといかん。こんどからこんな役割こんやうにして貰ふさかい」といはれるのです。さうまでいはれるのに我を張りとはして、そのうへ師匠がたに心配を付けては悪いと思ひましたので、越路さんのお扱ひに任かして、出ることにいたしました。そんなことから、私の役場の「中将姫」の「中」は、私の顔を立て、「中」とせずに「右大臣顯成館之段」と別に段割をして番附に載ることになつたのです。……この「中」も「立端端」ですが、幕内では「座敷半」といひます。「逆端」の「中」が「茶吞咄」、「引窓」の「中」が「かけ碗」、「中将姫」の「口」が「こぶにさんしよ」——「こぶにさんしよの合出ひもよかる」といふ文句からきてゐるのですが、こんな風に別に名前をついてゐる端端は、それぞれ語りどころのある「端場」なんです。

……「座敷半」は、座敷半にゐる中将姫を、岩根前が出てきて磨めるところなんです、中将姫がものをひひかけると、火鉢どわが前へ引取つて自分だけあたりながら、顔を反らして「そんなことは知りません」といふやうなことをいひます。たゞそれだけで、ほかに語りどころといつてないんです。ところで、これを意地くね悪くやるのはもとよりのことですが、いつて下司になつてはいけません。なにしろ「忝けなくも當今と仰ぐ春日の天皇を育て上たるこの岩根」など、いつたりするんですから、それだけの品位を持たせなくちやいけません。たゞ一と文句にそれを現はすといふことに、この役の眼目があるんです。……引受けたからは、なんでもこのところをうまくやつてみたい。——

四代目の彌太夫さんが「箱音嘶」の三段目の「口」の「どんぶりこ」をうまくやつて、「切」の長門太夫さんを喰つてしまつた話、五代目の彌太夫さんが「野崎村」の「口」の「透ひたし小助」で「切」の越路太夫（彌津大藏）さんを喰つた話もある。ひとつ、南部太夫の「切」が聴けなくなるほど、やつてみたい……そんな負けん氣、意地から、一生懸命に役の工夫をいたしました。……お蔭で、その時はどうやら評判もよろしいやうでしたし、樂屋うちでも褒められました。

その御褒美だつたか、翌月は三代目越路さんの槽下披露の興行でしたが、越路さんの「伊賀越」の「岡崎」に「段頭娘」といふ破格の役が一べんに私につきましました。……藝道の意地、張つてもいいへばいませうか。

その時はたゞもうそれ一途でしたが、べつだん南部太夫に意地懸恨があつたわけでもないでもなく、ふだんは普通に附合つてゐたんです。それだけに年月がたちますと、その時のことを思ひ出すたびに、南部太夫に悪かつた氣持がしてなりません。

……私はその翌年の、大正五年の十月、「木下蔭狭間合戦」の「壬生村」を語つて、三段目語りになりました。……それまでだつて三段目は語つてゐましたが、番附面に「序切」と二段目がついてゐないと、三段目としての格式が備はらないのです。……もつとも、これは「立て狂言」を上演しない今日の文樂座に當て嵌めるわけにはゆきません。

……いづれにしましても、今日では、かうした古い慣例は「封建制度」だといはれるのでせうが、藝の修業といふものだけは、格別に扱はれねばなるまいと存じます。……

古靱襲名・初代古靱

……もともと津太夫の名跡は、私にやると師匠はいつてゐられたのです。ちよいちよい法善寺のお宅へ伺

つてゐた父に、早くからさういつてゐられたのを、私は父から聞いてゐました。ずつとあと……明治四十四年の十一月、文樂座の部屋で中風で倒れられてからは、舞臺はその時を名残りに、師匠はお宅で臥りつきりにしてゐられましたが、その頃になつて話の模様は變はつて、兄弟子の文太夫が三代目を繼ぐことになつて、私には替りに彌太夫をやるといはれたのですが、そのやうな斯道で暗れがましい名跡を繼ぐのが障られましたので、私は辭退いたしました。……その時分には父はもうとつくにおりませんでした。引取つて一緒に暮らしてゐた櫻の宮の家で父は歿くなりました。そんなことがあつてから、私はよい名があつたら名前を替へたいと望んでゐたのです。

さうかうしてゐるうちに、三代目清六さんが私の合三味線になつて下さることに話がすゝみまして、「清六さんに彈いて貰ふのやつたら、古靱を襲名したらどうや」と、古靱の名跡を預つてゐられた八代目鶴澤三三三さん（前名四代徳太郎）からお話があつたので、こんどは私も悦んでお受けしたのでした。……三三三さんは初代古靱さんに子供の時から大變に可愛がられた方で、その頃はまだ若くて、吉丸といつてゐられた時分ですが、凶變のあつた土田の小屋が閉場ときまつて、巡業先の紀州の新宮から一座が歸阪するときまで、三三三さんは古靱さんと相觸れあつたさうです。古靱さんが歿くなられると、名跡はずつと三三三さんが預つてゐられて三十二年目に私が襲名したわけでした。

……それまでも、古靱を繼ぎたいといふ申し出は、いくらもあつたんださうですが、大隅さんや法善寺の師匠が「あんなもんに繼がされん」といつて納得されないので、初代のお弟子にさへ繼がさなかつたんださうです。それほどに師匠がたが重んじてゐられた、一代の名人の名跡を私が繼ぐことが出来たのは、もちろん三三三さんの御厚意もありですが、ひとへにこ

それは清六さんに彈いていたことになつたお蔭だつたのです。

……それは幕内でも二なにもそんな縁起のわるい名を無理に纏がなくて……といふ人もないではありませんでした。私は、なにがどうあらうと名人の名た、さう思つてましたんで、そんなことは、ちつとも氣にかけませんでした。

……縁故からいひますと、古靱さんは、私が十歳の折、東京ではじめて入門した五代目竹本津賀太夫さんの師匠にあたります。また初代の清六さんは、古靱さんの師匠の靱太夫さん、古靱さんの師弟二代に涉つて彈いておられます。後に松屋町の師匠も暫く古靱さんを弾かれましたが、歿くなられた時には五代目の徳太郎さん——後の二代目の清六さんが彈いておられたのです……そんなわけで、古靱さんは、私にとつてもなかなか無縁ではありませんし、清六といふ名前とは淺からぬ由縁があるのです。

明治四十二年四月に二世古靱太夫を襲名いたしました。この時の役は「先代萩」の「竹の間」三味線は久々で出陣の三代目野澤勝市さんでした。その翌々月の六月興行から清六さんに彈いて貰ひました。

私が古靱を襲名した翌年の一月、法善寺の師匠は病中ながら御自身七代目綱太夫になられ、それと一緒に文太夫が津太夫になりました。文太夫はもと、歿くなられるまで、その前の濱太夫さんの弟子だつたので、津太夫襲名前の一と興行だけ濱太夫を名乗りました。

……大道具の桐徳が古靱さんを殺した事情ですか？もつと委しく訊いとよかつたんですが、惜しいことをしました、新靱さんなんかに訊けばいくらでもきけたんですが……。大水やらコレラの流行やらで、興行も跡絶へがちだつたところへ、旅に出た一座がいろいろの障りて戻つてこない。五日が十日になり、それがまた延びる。……土田の小屋は看板を掛けたり外

したりする始末に、小屋關係の者はすつかり生活に窮してしまつて、それがために旅元へ日取りの打合はせにいつた仕打の使ひが、責任感から首を括るといふ騒ぎまで持ちあがりました。戻られてから古靱さんは、亡くなつた者の弔ひもなされれば、小屋の者にはお茶子にまで手當を出されたさうなんですが、桐徳はそれでもまだ古靱さんの計ひに不服で、あんなことを仕出かしたんだといふんですが、どうでせうか……。随かに

金の問題が絡んで来たとは聞いてゐます。私もどが聞くんでは、そりあ、どうしたつて古靱さんにいふ方の話ばかりですからね。古靱さんは五尺にも足らぬ小兵な方だつたさうで——、息子さんが器用に繪をかゝれて、古靱さん一代にあつたいろんなことをかいた電帖を、以前に私に贈つて下さいましたが、力士の小野川とは大變に昵懇だつたらしくつて、そんなかにも二人で着物の取替つこをして、大きな小野川が腕も隔も出る出しのツンツルテンで立つてゐる横に、小ひさな古靱さんが、袖口に手も届かぬだぶだぶの着物の、裾を引摺つてゐられるところがかいてありました。……は、らはら、屋の呂太夫さんのはあのとほり立派な恰幅の方だつたので、一緒に旅へ巡業に出られると、よく旅の仕打が古靱さんと間違へて呂太夫さんを正座へ据へたさうです。あとでそれと判つて無禮を詫びたなどいふ話も聞いてゐます。……古靱さんは、そんな柄の小ひさい方だつたくせに、いろいろきまますと、なかなか氣性の勝つた方で、ひとつ違へばあとへ退かぬ、負けじ魂を持つてゐられたやうです。人の話を聞いたりなさる時には、はじめは慇懃に「へい」「へい」と頷いて聽いてゐられるんださうですが、なにが話の筋に氣に染まぬ節があつて「なんでございます？」と頭をあげられると、それからが面倒だつたさうです。……事情があつたにしても、扱ひにくい相手であればあるで、なほさら負けてゐられないといつた強氣な御性分

も、御災難を招いたのでないでせうか……。

以前、人形遣ひに吉田冠四といふ、いつも少しボーとしてゐる老人がゐましたが、この人は當時土田の小屋に勤めてゐて、その晩樂屋の風呂に運入つてゐると、そこへ斬られた古靱さんの腕が降つてきて、それからボーとなつたんやと、自分でいつてゐました……。

(往時、筆者は、今は世にない稲田ながしなる廻から、初代古靱太夫の横死の顛末を聞いた。稲田氏の生家は、御靈神社南門の通りを渡邊筋西へ運入つた兩側のはりまやといふ洗張り屋。事件當時は十三、四歳の、界限を遊び廻はつてゐたは、つさい(お轉變)だつたと彼女自身いつてゐた。稲田氏の話は巷説であり、主として桐徳の立場を語るものであるが、真相の一面にふれるところもあるかと思はれる。

——桐徳は土田の小屋の仕打が替はる前からの、小屋に居付きの道具方の頭であつた。御靈南門を南へ一丁半ばかりの東側の露路に住んでゐた。そこは妾宅であつたが、桐徳はそこで寝起きして、小屋へ勤める傍ら、手傳ひ人足の入れ方をしてゐた。露路なかではあつたが、釋業納手綺麗な暮しをしてゐた。正妻は髪結ひをしてゐて、それと遠くに住んでゐた。業體に似ず博奕も打たず、腰も低かつたので、町内の氣受けもわるくなかつた。御靈神社の祭禮には、いつも御輿の采額をしてゐた。三十を幾つも出ぬ血氣盛りで、男振りがよく、界限の娘たちに騒がれてゐた。

土田の小屋は、長らく芝居ばかり打つてゐて、御靈近邊の商家であつたし、しやうし堂とごしやせんとの両者が共同で仕打となり、古靱太夫を迎へて久し振りに人形淨瑠璃の興行をしたのであつた。歳を上げなのは明治十年の二月。凶事のもつたのは翌十一年の二月二十四日。

梶徳は突如に罷免せられた。その裏面の事情は
稻田氏も詳かにしない。そして梶徳に替つて採用
されたのは、梶徳と同じ露路に住んでゐる、稻田
氏にいはすと「たゞの叩き大工」の松さん(一)で
あつた。界限に顔を買つてゐた梶徳の面目は丸潰
れとなつた。梶徳は殺意を起した。梶徳の狙つた
のはこしよせん、しようし堂、古靱太夫、松さん
の四人であつた。兇行は怨恨のない人々に迷惑を
及ぼすを顧慮してか、千秋樂の夜を選んで行はれ
た。こしよせん、しようし堂は、不穩の噂に怯へ
て、それよりさき姿を隠してゐた。松さんは辛ふ
じて難を逃がれた。不運にも危害を蒙つたのは古
靱太夫一人であつた。當夜はらはら屋の呂太夫は
歸宅しようとして、樂屋の階段で梶徳とすれ違つ
たが、梶徳は呂太夫には手をふれやうともしなかつ
た。兇行後梶徳は自殺した。

以上が稻田氏の話の大略である。
筆者の臆測を加へるなら、梶徳の罷免は仕打側
の意向であつたが、こしよせん、しようし堂では
手に餘る相手であつたので、古靱太夫の座頭の權
威に依存したものであらう。事情はいろいろ想像
されるが、古靱太夫に仕打側の意向を納得させる
だけのものがあつたと考へていゝであらう。替り
の人選などは古靱太夫の與り知らぬところでなか
らうか。ともかく事件は單純で梶徳の狭量な職人
氣質から起つたことであつたが、古靱太夫の災難
は傳へられるその傲岸な性格にも負ふものといへ
るであらう。

稻田氏はまた、當時を追憶して、口を極めて古
靱太夫の淨瑠璃を褒めるのだつた。
「それ偉いもんだしたぜ。越路はん(橋津大掾)
みたいな行儀のわるい淨瑠璃やちがひましたさか
いなア」といつてゐた。

古靱さんは、稻荷の文樂軒芝居へ這入られた時も、
越路さん(橋津大掾)より顔は上でしたが、技倆にも
まつたくそれだけの開きがあつたさうです。有名な話
ですが「加賀見山」の七つ目のお初と尾上の掛合ひの
役を古靱さんと越路さんが毎日交替で動められた時に
は、こんどは越路さんのものだらうといはれてゐたに
反して、蓋をあけてみると、お初へ廻はつても、尾上
へ廻はつても、越路さんは古靱さんのそばへ寄りつけ
なかつたといふことです。……越路さんは美音で賣り
出してゐられた方、古靱さんはべつだん聲量のあり餘
つた方でないばかりか、喘息持ちだつたさうですが、
藝の位といふものは、なんとしても動かせないものな
んでせう。

(初代古靱は明治三年七月文樂に入座。同六年四月
中狂言に「重の井子別れ」を勤めて退座。)

……「酒屋」の「今頃は半七さん。どこにどうして
ござらうぞ」の節が長くて、京へいつて歸るほどある、
といはれてゐたさうで、それがまた大變によかつたさ
うですが、長いとばかり思つてゐると、時には短かく、
あつさりすましてしまふといふ天邪鬼もやられたさう
です。……いつのことですか、「阿波鳴門」で「かゝさん
の名は阿波の十郎兵衛……」といひ間違へられたもん
で、あとで「とゝさんの名はお弓と申します」といつ
ておいて、すぐ「親の名まで取違へるほど苦勞しやる
か、可哀や可哀やア……」と次のお弓の詞に當意即
妙の入れ言をして、その場を取繕はれたさうです。……
そんな風で、いつどう逸れてゆくかわからないので、
三味線の方も、ちつともウツカシしてゐられなかつた
さうです。

……古靱さんのおとつあんといふのは、もとは大
工さんで——それで古靱さんは梶徳の家とも以前から
の知合ひだつたやうにもきゝますが——若い時から飲
む、打つ、買ふ、の道樂に身を打ち崩した揚句の果が

言になつて、按摩をしてゐられた。雅ない古靱さんが
手引して、靱太夫さんのところへも療治にいつてゐた
のが、斯道へ這入られる縁のはじまりだつたんです。
その子供が、聴き覺への淨瑠璃を器用に語るに聞かれ
て、靱さんがやらしてみられるとなかなか見込みがあ
る。それから弟子にして、江戸へ一緒に連れて上られ
たのでした。——はじめは豆太夫、それから靱小太夫
といはれました。

……この、古靱さんのお師匠さんの初代の靱太夫と
いふ方は、靱の干鯛問屋の御主人で、俳名を燕子とい
つてゐられた素人から太夫になられた「化け物」だつ
たんです。師匠は二代目の巴太夫さんでしたが、靱さ
んが太夫になつて初めて御靈の土田の小屋へ出られた
折の役は「質店(染模様妹脊門松)」で、これを「付け
物」にせずに、前もアトもつけて、院本一冊をまるま
る出されたのです。さうなると「立て狂言」と格は同
じになるので、靱さんは出るなり立物扱ひだつたわけ
です。格式を紊すといふんで、因講とのあいだにいざ
こざが起りましたが、巴太夫さんがあとへ退かれな
いもんで、因講では以後巴太夫一門とは附合はぬといふ
申し合はせをしました。ところが蓋をあけると、靱さ
んの人氣は大したもんだつたんで、形勢はひつくりか
へつて、因講の申し合はせも立消へになつて、反對し
た側はすつかり面目を失なつたんでした。……それか
らは初代大靱さんと、替り合つて、これこれに役
を持たれてゐたさうです。

靱さんは嘉永元年に江戸で歿されましたが、そ
の時には初代の清六さんが弾いてゐられました。靱さ
んが歿なられてからは、引續いて古靱さんを弾いて
寄席を廻はつてゐられたのですが、途中で清六さんひ
とり歸阪されました。それにはなんかいざこざがあつ
たんでないかと思ひます。といふのは、清六さんは歸
阪後、二代目富士太夫に二代目靱太夫を襲名させて、

披露をして仕舞はれました。古靱さんはその後江戸で暫く靱太夫を名乗つてゐられたんですが、大阪で二代目が出来るといふ噂をきいて、慌てゝ歸阪されましたが、その時はもうあとの祭りでした。清六さんの後楯とあるからは苦情もいへず、二代目相續は諦めたかわり、二代目ならおれの方が古いんだといふころで、古靱太夫と名乗られたのでした。

……息子さんの畫帖には、いろんなことがかいてありましたが、なんでも靱の川でないかと思ひますが、川向ふの寄席へ出勤されるのに、橋を廻はると違ひので、鹽に乗つて、弟子にそれを押さして川を渡つてをられるところや、可笑しいのは、旅で、朝の早い古靱さんが、弟子たちの宿の表から、恰度そこに有合はした長い竹筒を口に當てがつて、二階に寝てゐる弟子たちを「こら起きんかい」とかなんとかいつて起してゐられる。ところが、その竹筒は、弟子たちが夜中に無精して、二階から小用を足すのに使つてゐたものだった。——そんな繪もありました。……息子さんは綱吉さんといひまして、若い頃には、やはり豆太夫を名乗つて、暫く太夫になつてゐられたのですが、ごくどうでこれはモノにならず仕舞ひ。古靱さんの一周忌に繼い綱吉さんが舞臺でお辭儀をしてゐる繪もありました。繪をかいたりされる位で、根が器用なたちとみへて、後には千葉の方で出版屋をしてゐられたが、致くなられてよほどになります。綱吉さんの姉さんにあたる方も、近い頃東京でお逢ひして、いろいろ古靱さんのお話を伺ひましたが、その時に八十幾つのお體でした。その方も今はもうゐられません。

……古靱さんは、時代、世話どちらもよかつたやうですが、その内にも世話物を得意になすつたやうで、「酒屋」とか「質店」とかいふやうなものが特によかつたと聞いてゐます。とにかく情語りの名人で「二十四孝」の「十種香」の濡衣の「廣い世界に誰あつて、

お前の忌日命日を、弔ふ人も情なや」といふ詞とか。「朝顔話」の「宿屋」の徳右衛門の「——なんとつま不仕合はせな者もあるものでございます」といふ詞などその一言でホロリとさせられたやうです。……私もたとひ子供の時にでも、先代の淨瑠璃を聴いてゐたら……と思ふんですが、なにをいふにも、私の生れた年に致くなつてゐられるんでは及ばぬことです。が、どうかして私も、先代のやうに一言の情で泣かず、そんな淨瑠璃が語りたいものだと思つてをります。

……致くなられた折の古靱さんの役は「道明寺」の「奥」半分と「葛の葉子別れ」で、その時の「葛の葉」の本と見臺を、六代目の津賀太夫さん——五代目のお弟子で、和佐太夫から六代目になつた方——が五代目さんから譲り受けてゐられたのを、私がまた譲つて戴いて、このあいだまで大切に所蔵してをりましたが、これも焼いて仕舞ひました。惜しいことをいたしましたた……。

大正六年の二月は、先代の四十年忌の祥月に當りましたので、追福のころで「葛の葉子別れ」から「亂菊之段」までを文樂座で出しまして、私は初役で「子別れ」の「切」を勤めました。命日には入場のお客さまに聊かなものでしたが供養を差上げました。先代は本名を木村彌七といはれて、致くなられた時は五十二歳でありました。

天狗鼻を折る

……天狗といふと、致くなつた源太夫(七代目)が、ひと頃は誰の淨瑠璃も買はうとしないで、おれでなければといふ高ツ調子なのは手がつけられませんでした。……そのうちに、或る時「彦三」が出来まして、源太夫に二段目の「切」——お園の出立——を一人で語る役がつかました。致くなる十年ほど前のことですから、源太夫は四十過ぎだつたと思ひます。私より三つ

年下でした。……ところが、日頃の鼻つばしらの強いに似ず、この役には源太夫すつかり手古摺られて合三味線の野澤勝市と二人で、興行中も一日もかまはず松屋町の師匠のところへ稽古に通つてゐました。この役で苦しんだのが、よくよく骨身にこたへたとみへて、「おれもお前もよつぽどヘタや。ヘタとヘタとが寄つてたんでは、よけあかん。別れやうやないか……。」さういつて、この興行かぎりで勝市とも別れて仕舞ひました。

かけかまひのない間柄でしたから、暫くして顔を合はした時、ひやかし半分に、「どうやつた？」と訊いてやると、「いや、おどろいた……。」といつて首を振つてゐました。

それからは、源太夫はふつつりと、誰の淨瑠璃も批評しないやうになりました。たまたまこつちから誘ひをかけても、「皆ようやる。皆ようやる」といつて遮ぎつて仕舞ふんです。可笑しくなつてくるんですが、手の裏を返へした源太夫の心機一轉に、私は好感を持ちました。事實、源太夫の藝はそれから上つたんです。

今ひてくれたら……と、この頃になるとよけい思ひます。あるあいだは、なんの氣なしに附合つてゐましたが……
……ゐてくれたらと思ふのでは駒太夫、それに鍛太夫なんかもね……。

源太夫は六代目の弟子で、おとつあは彦六座の表に勤めてたお人でした。

近頃河原健引・堀川猿廻しの段

五行院本の相違

本文は五行本。括弧内は院本。傍線を附したは院本にない文句。古靱師は○は院本に據り、□は五

行本に據つて所演。——最後の猿廻しの一節は、
 全文二世津太夫の用ひた院本にも五行本にもなき
 入れ文句であるが、古謡師もこれを用ひてゐる。

○季三味線少指南屋も○お鶴さん魔待遠にあらうな
 ○あの面白さを見る時はオットオホ、よしよし(ムよ
 しよし)○オ、今日はマアそこまでそこまで(どこで
 彈きなさつても恥かしい事はないぞへ)と○膳もそこに
 して置いたぞや○オ、徳よ今戻つたかよ○親を尋ねて
 やかましいソレ兄ちやつと傍へやつとやりや○ソレち
 やつと乳を呑してやりおれ(呑してやれ)○母では
 なうて子供のたには(ためには)○雪か花かと申すや
 うな上白米の仕送り○もし出養生でもさしますなら○
 母に案じをかせせぬ贅(嘘)八百さへ一貫に○機嫌
 よげに打ちうなづき○くれぐれもいしやつたぞや○
 おもはず知らず涙がドレ灯を燈そと○灯影も洩るゝ暖
 簾ごしヤコレお俊○是も行衛が知れませぬといひ切つ
 て○開くたび毎にびくびくすると○コレコレお俊何も
 案じることはないはいの○詰らぬ義理を立抜いて年寄
 りの此母(婆)に○兄も俱々コレお俊今母者のいはる
 ゝ通り○どいて仕廻へば赤の他人じや○好きの物(飯)
 さへ咽へ通らぬはいのふ○腹助けじやと思ふてどいて
 たもヤコレ(ヤ、ヤ)顔む○わしや得心してをります
 るちよつと逢ふし其上で憎し悪しもない様で得心をさ
 せまして品やう譯の立ように○無理殺しにせふも知れ
 ぬはいの○コレヤめつたにかみやはされぬはいの○思
 ひ切るのがあつちの爲オ、あつちの爲○コレコレ(ツ
 レツレ)むつかしから共ツイ一筆○兄や親箱とつてや
 りや○書残すとは露知らぬ與次郎は(が)傍からコレ
 イノコレ○サアお俊こちらも爰で(ニ)○聞にお俊が
 (は)飛立つ思ひ○無理に引込み(む)取違へ○わしや
 表に居るはいなア何じわしや表に居るはいなア○母親
 も何じや何じや何じや傳兵衛の加勢○どうやらこりや

娘ではないやうなはいの○くらがり紛れに材木がまぎ
 れ込みはせぬかや(まぎりやせぬか)○妹まで難儀す
 るわい○ム、スリヤお俊が其退状をサア(コリヤ)ど
 き状じやぞどき状じやぞ○オ、魔七腹が立ふ道理じや
 道理じや道理じやはいなア○氣を鎮めて其退状を見て
 下さんせいなア○皆目おれはナニオ、祐筆じやわい○
 ヤア何じや書置じや○悔りすることははいの○う
 ろたへさして門へいで(でム)○ホ、ホ、ホ、ホ、
 そんな嘘は喰ひませぬ○爰にはおれがへばり(へたば
 り)付いてゐるわい○物こそ(こそは)よう書かね
 聞く事は祐イヤアソレ今のオ、無筆じやないわい○
 よんだよんだよんだエ、誠に是迄、御養育○せめて少
 しの御恩報し○思はぬ(づ)此度の御身の難も根を尋
 れば皆我故に候へば○サア(サアサア)其跡をちやつ
 と讀んで下され○先程傳兵衛様へ退状と申して認めし
 は○戸口を明けは走り寄る(行く)妹を無理に四人が
 顔合し合したためいきの(つき)○何と言葉も傳びよう
 え(傳兵衛が)○いふもおろおろ母親もオ、さうじや
 さうじや○鳥類畜類でも子の可愛に(さ)かはりは
 ないもの翌は浮名の草双紙お俊傳兵衛といはず氣か○
 親御様(たち)が聞かじやつたら○ア、傳兵衛さんの
 泣しやる(なげがしやる)も道理じや又お俊の泣やる
 も道理じや母者人ごなたの泣しやるのものな道理じや
 道理じや道理じや道理道理といふて居てはねつつか
 らはつから(根から葉から)いつ迄も○ガコレ傳兵衛
 さん(二人ながら)母者人が(の)今の言葉○此編笠
 で(に)顔隠し○祝言の壽こなた衆も生別れの盃○お
 猿は目出度や目出度やね(な)○機嫌直して盃を戴
 かんせコレコレ戴くノウヨウ(ナラ)盃をさんな又あ
 ろかいな○足で盃をさすはあまりつれない○それでは
 蘇御さんがいたよかんせぬはいのふ。

蘇御がおきんさんせぬはいの。そこらでちよいと起し

巻	章	徳	養
12	横光利一	雲	解 (賣切れ)
13	深田久彌	津輕の野づら	八・四〇一六〇
14	武者小路實篤	愛と死	三・四〇一五〇
15	太宰治	晩年	八・四〇一六〇
16	内田百閒	私の先生	五・〇〇一五〇
17	龜井勝一郎	人間教育 (校正中)	
18	久保田万太郎	あぶらてり (校正中)	
19	吳清源	莫愁 (編輯中)	
20	堀辰雄	曠野抄 (編輯中)	

養徳社